

北アルプス最北部山行 - 白馬～親不知 -

2009/08/13～15

メンバー：遠藤，犬塚

2009/08/13(Thu)

マルメロの駅ながと 4:10 - (車) - 八方のバス停そば駐車場 6:00 - (タクシー：3,000 円) - 猿倉 - 白馬尻小屋 7:40 - 白馬岳頂上宿舎 11:15 - 白馬岳 12:35 - 雪倉岳避難小屋 14:40

ながとの道の駅に集合し，遠藤さんの車で白馬を目指した．事前の予報では 1 日目のみ雨で，2，3 日目は晴れであった．1 日目は諦めるから 2 日目以降は晴れてくれと願った．2 時間弱で八方にある駐車場へ．タクシーを利用すると猿倉まで 3,000 円とのこと．4 人で乗ればバスよりも安くなるので，相乗りしてくれる方を探した．準備していた女性 2 人に声を掛け，交渉成立．タクシーで猿倉を目指した．タクシーの運転手は訛っているなぁと思ったので，出身を聞いたところ長崎とのこと．女性陣と話をするつもりでいたが，運転手と地元話．僕には日本中にお父さんがいるのだが，白馬のお父さんはこの運転手さんに決定させて頂いた．別れ際にはお父さんの携帯番号をゲットした．女性の携帯番号ではなかったが，今回はそれ以上の価値があると思われた．

八方までは曇りだったが，猿倉は雨．レインを着て，出発した．ダラダラと続く林道を抜け，登山道を少し歩くと白馬尻小屋に到着．ここから白馬大雪渓を登る．アイゼンを装着している人は 7～8 割程度か．僕らはノーアイゼンで行った．雪渓はガスっており，視界は悪かった．雪渓を登りながら，足を滑らせたらどうなるだろうかと考え出した．僕の結論としては，止まらずに，場合によっては死ぬのではないかという結論に達した．そう考え出すと，雪渓が氷のようにツルツルに感じるから大変だ．天狗岳東壁での雪上訓練のキックステップを思い出し，慎重に登った．雪渓の中ほどを過ぎた辺りにガレ場があり，そこで休憩をした．しばらく行くと雪渓が終わりホッとしたが，寒さも手伝ってそこからの登りはとても急に感じられた．途中パトロールしていた人と天気の話をするると二つ玉低気圧が発生して，明日以降も天気は期待できないのではないかという話だった．事前に確認した天気図ではそういう傾向はなかったので，半信半疑でその話は聞いて，後でラジオの天気予報で確認しようと思った．白馬岳頂上宿舎に着く頃は風もひどく，宿舎のレストランに入り，今後の計画を話し合った．楽な方へ逃げようとする気持ちを何度も振り払い，予定通り進むことを決めた．レストランで飲んだホットココアは僕をちょっとだけ勇気づけた．宿舎のそばの水場で水を補給し，先へ進んだ．白馬山荘を越え，白馬岳頂上に立った．ちなみに，白馬山荘での気温は 10 程度，風速は 10m/s 程度であった．頂上では何も見えずとても残念だった．しかし，今日の残りの日程は基本的に下りのみ．そう考えると幾分気持ちが楽になった．三国境を過ぎた辺りから天気が幾分回復し，時折ガスが少しだけ晴れ，下界の森が見えたりもした．それだけで僕らは喜んで，はしゃいだりもした．鉢

ヶ岳のトラバースルートにはたくさんの花が咲いていて、遠藤さんは必死にその花を撮っていた。花に目覚めていない僕にはただの花にしか見えなかったが...。とりあえず花に目覚める気配はない。雪渓が溶け、それが川となっている場所が数箇所あった。その一つで洗濯したり、水を補給したりした。風は収まり、ガスっていただけであったが、雪倉岳避難小屋の手前で急に雨風がひどくなった。寒冷前線の通過が始まったのではないかと思った。少し降られただけで雪倉岳避難小屋に着けたのは幸いだった。避難小屋には二人のパーティーがいた。二部屋あったが、一部屋は水浸しだったので先行パーティーと一部屋を分け合った。6畳が二部屋あり、小屋の中にトイレがあった。こういう天気ではトイレが小屋の中であって、非常に有難かった。今夜のご飯はレトルトカレーとレトルトのコーンポタージュ、海藻サラダだ。相変わらず依田君さんから頂いたお米は美味しかった。先行パーティーとお話をしてみるとなんと松本労山の方だった。全く同じルートを辿るらしく、親近感が湧いた。天気図は書かなかったが、ラジオを聞いて気圧の位置はある程度把握した。明日の天気は回復するのではないかと思ったが、自信を持って言えるほどの確証はなかった。夜中の風雨は凄まじく、さながら台風であったが、小屋の中は快適そのものであった。

2009/08/14(Fri)

雪倉岳避難小屋 4:00 - 雪倉岳 4:40 - 朝日岳
8:30 - 黒岩山 12:00 - 梅海山荘 15:00

目が覚めた頃には風雨はかなり収まっており、少し安心した。レトルトのおでんを入れた雑煮を食べ、出発。しばらくはヘッドラの光を頼りに歩いたが、4:30 を過ぎるとヘッドラも必要なくなった。日の出前に雪倉岳頂上に到着。一面には雲海が広がっており、妙高山や火打山が頭を出していた。雲海は2,000m 辺りに広がっているようだ。御来光が望めそうだと分かり、テンションは急上昇した。御来光は妙高山の頂上から上がり、僕も遠藤さんもシャッターを切るのに夢中だった。白馬岳も剣岳も見れて、昨日の雨のことは許そうと思った。雪倉池の周辺ではライチョウも見れた。斜面からはいたる所から水が川のように流れ出ている。燕岩にも気付かずにドンドンと歩を進めた。その辺りから



朝日岳を飲み込む雲海



妙高山から登る御来光

はずっとガスの中だったが、それは高度によるもので、朝日岳の手前ではまた晴れるだろうと思った。案の定予想は的中し、朝日岳頂上からは 360° の展望が得られた。日本海も見え、やはりテンションは上がった。前日の雨やぬかるんだ登山道で濡れた服や靴下を乾かしながら、頂上ではのんびりした。遠藤さんは携帯の電波を探していたが、見つからな



白馬岳と朝焼けに燃える稜線

かったようだった。大休止の後ようやく出発した。長梅山は地図の場所と実際の場所が違っていたのが気になった。それまでは僕が先頭であったが、そこからは遠藤さんが先頭になった。遠藤さんはぬかるみも気にせずドンドンと突き進んで行った。その頃から再びガスの中を歩くようになっていた。北俣の水場で水を補給し、今日最後の犬ヶ岳の登りに入った。偽ピークに騙されながら、ようやく梅海山荘に着いたときにはお互いヘトヘトだっ



ライチョウ

た。梅海山荘には既にたくさんの方がおり、とりあえず外に銀マットを敷いて、物を乾かして過ごした。疲れた体にパイナップルの缶詰は最高のおやつだった。山荘内は火気厳禁で、炊事は入口の机の上のみだったが、たくさんの方がいたので夕食は外で作ることにした。マーボー春雨とサンマの缶詰を食し、夕陽や漁火を見ていたら 19 時を回っており、小屋に戻ると確保しておいたはずのシュラフスペースがなくなっていた。既にみんな寝ていたのだ。空いているスペースを見つけ、そこに潜り込んで寝た。

2009/08/15(Sat)

梅海山荘 3:15 - 白鳥山 6:25 - 親不知 11:10 - 海 11:30 - 親不知 14:24 - (電車：1,110 円。糸魚川，南小谷で乗換) - 白馬 16:27 - 駐車場 16:35 - マルメ口の駅ながと 18:50

一時過ぎには目が覚めた。きっと下界が恋しいからだろう。ひっそりとした小屋の中で朝ごはんの準備を始めた。しばらくすると遠藤さんも出てきた。昨日のマーボー春雨の汁にレトルトおでんを入れ、雑煮を作った。辛味があると味に深みが出た。綺麗な星空の中出発の準備。風はなく、寒くもない。こんな気候ならずっと山にいてもいいかもと思った。でもそれも一瞬。下界に降りたらあれもしたいこれもしたいと考え出した。さあ、出発だ。ヘッドラでぬかるんだ下り道。泥まみれになるのは嫌だから、一步一步踏み締めながら進

む。菊石山を過ぎた辺りで御来光。木々の隙間から御来光を眺めた。今日も天気は良さそうだ。白鳥山まで来るといよいよ海が近くなってきた。金時坂の下りは段差が全体的に高く、膝が少し痛くなった。ストックがほしいと思った。坂田峠ではアスファルトの林道を横切ったが、このまま林道を下ろうかと思った。坂田峠を過ぎた辺りでウーっという音がしばらくしていた。僕はその音は下界の車の音であり、いよいよ下界だと思っていたが、後々聞いた親不知観光ホテルの方の話ではそれはクマの鳴き声であった。松本労山の方も聞いたとのことだった。無知とは恐ろしいものである。親不知への最後の1時間は地獄だった。下界の音がみるみる近づいてくるのに、歩けど歩けど登山道。エネルギーも切れてきて、最後は亡霊のように歩いていたと思う。ようやく道路に出たときは本当に嬉しかった。自販機へと走り、コーラを一気飲みした。ここでビールでないところからすると僕はまだ大人じゃないのかもしれない。一息入れて、海へと降りた。一度切れた精神力で海まで下るのは辛かった。海まで行かなくてもいいんじゃないかとも思ったが、ここまで来たので最後の力を振り絞った。海にはおもちゃのイルカが打ち上げられており、僕はそれに乗って遊んだ。ホテルへ戻ると、松本労山の方もちょうど降りてきた。みんなで握手をしてお互いを健闘しあった。ようやくお風呂へ入れる。これでようやく人と近付いて話せると思った。ホテルには梅海新道を降りてきた方が既に3人おり、梅海新道を歩き通した親近感からすぐに意気投合した。ホテルから親不知の駅までホテルの車で送ってもらった。親不知は無人駅だった。もちろん周りには何もなかった。糸魚川で大糸線に乗り換えだったが、遠藤さんが駅弁を買いに走ってくれて、僕らはようやくの昼飯にがつついた。大糸線の汽車はレアものらしく、至る所にカメラ小僧がいた。僕は彼らに向かってピースをしてあげた。松本労山の方、ホテルで意気投合した方とたくさん話をして、電車での移動も楽しいなと思った。南小谷で乗り換え、白馬へと着いた。1日目のタクシーの運転手に電話をして、白馬から八方まで送ってもらった。帰りは僕が運転し、道の駅ながとへと帰ってきた。

今回の山行はたくさんの人と出会い、触れ合うことができた山行であり、出会い・触れ合いといった点では今までで一番の山行だったように思う。小屋の中でゆっくりとたくさん話ができただこと。梅海新道というある種エキセントリックなルートを踏破したという連帯感。学生時代に戻ったような気分させる電車での移動。これらの要因のお陰なのかもしれない。小屋泊や電車での移動も悪くないと思った。梅海新道の良さはあの静けさであり、同行パーティーとの連帯感だと思われた。今はまだ梅海新道はもういいなんて思っているが、しばらくすると梅海新道にまた行きたいなんて思うのかもしれない。辛いことは少しずつ忘れるが、良かったことはなかなか忘れられないのである。